

専門高校と個性観

——「自分探し」を超えて——

喜多下 悠貴（東京大学教育学部）

◇要約

- ◎本稿の目的は2つある。生徒の「自分探し」への志向に由来する弊害を、量的なデータのレベルで検証すること、そしてそこから一歩進んで、明らかになった「自分探し」の弊害を克服する手がかりを、専門高校に注目して探ることである。
- ◎分析の結果、生徒の「自分探し」志向は、進路活動への消極性、将来に対する悲観的イメージという弊害をもたらすことが明らかになった。
- ◎以上の弊害を克服する手がかりとして、「継続的に自分を育てていく」という個性観が示唆され、それは専門高校における職業生活を意識した授業によって涵養されるということも明らかとなった。よって本稿は、「自分探し」の弊害を克服する環境としての専門高校の意義を見出すものであるといえる。

1 問題設定

本稿では次のような問題を扱う。いわゆる若者の「自分探し」言説における、「自分探し」志向がもたらす弊害は存在するのか、それはどのような弊害なのか。そして実際に何かしらの弊害が生じているのだとしたら、それを克服する手がかりはあるのか。その際に専門高校という場合は、その問題に対していかにかかわることができるのか。以上のような関心に焦点を当て、分析を行う。

個性、言い換えれば「自分らしさ」というものが至上の価値となり、学校教育においても生徒一人ひとりの個性を重視することが目指されるようになって久しい¹。また、「個性重視」は、学校側が配慮すべき価値基準としてだけでなく、生徒自身もそれを持つよう奨励されていることも、荻谷（2008）により指

摘されている。「自分のやりたいこと」を尊重し、「自分探し」を中心とした高校の進路指導の実態には、個性の追求が、生徒も当然持つべき価値として認められていることが示されている。リクルートによる「高校の進路指導に関する調査」（2009）では、「進路指導で生徒に伝えていること」で「自分のやりたいこと・向いていることを探みなさい」に回答した学校は全体の95.8%にものぼった。「自分らしさ」を最優先して、それに見合った進路を選びとるべきであるというイデオロギーが学校に存在していることがここに示されている。

このように、今や教育現場の主流を占める「自分探し」という考え方であるが、現在ではその弊害についても同時に語られるようになってきている。そのことについては次節で詳しく述べるが、本稿ではその実証的な分析と、

それに対する処方箋の提示を目的とする。そして分析に際しては、生徒の個性観と、専門高校の授業形態という2つに特に注目した分析を行う。この2つに注目することによって、より具体的な、学校教育についての示唆を導き出せると考えるためである。

2 先行研究の検討

中間(2008)によると、「自分探し」をめぐる議論が展開されるパターンは3つにまとめることができるという。まず1つ目は、「自分探し」の必要性や意義を強調するものである。2つ目は、実際の「自分探し」行動へと踏み出した者への取材をもとにしたルポタージュである。これは本人自身がその過程を綴る場合もある。

そして3つ目が、なぜ「自分探し」が起こるのかを問題の中心に据え、その背景に踏み込んで要因の説明を試みたり、その行動の本質について明らかにしたりしようとするものである。この視点からは、フリーター、より広くは若年労働者を主な対象とし、仕事との関係性において「自分探し」が取り上げられることが多い。山田(2002)や玄田(2001)は、「自分探し」と、仕事をめぐる「やりたいこと」の論理に注目し、理想(「やりたいこと」と現実のギャップといった問題を指摘している。「自分探し」や「やりたいこと」の論理は、個人の意識に属するものではあるが、社会構造、さらには仕事を「やりたいこと」でしか語れない言葉のヴァリエーションの過小という問題(久木元2003)など、必ずしも個人の問題に還元・回収されえない面があることは念頭に置くべきである。

それらの議論の中には、「自分探し」を批判的に捉えるものも少なくない。三浦(2005)は、具体的な仕事をすることでしか自分は見つからないと説く。荻谷(2008)は、「自分探し」を皆に奨励するような学校による進路指導があるにもかかわらず、そのスローガンの具体性のなさ、自己実現を伴うような実

際の職業機会が限られているというアンバランスが、宙ぶらりんな「自分探し」状態を生んでいると分析する。両者の主張の根幹部分は、ともに職業生活の中から「自分らしさ」を見つけるという「逆ルート」の提唱にある。

以上を踏まえながらもここからは、本稿の扱う範囲、目的を鮮明にするために、学校教育と「自分探し」の関係について触れている荻谷の議論をもう少し詳細に追っていくことにする。まず荻谷は冒頭で、高校生へのインタビューを紹介する。そこには、「ほんとうの自分」を探しだすことを願い、また、やってみたくらいにあふれていながらも、それらのやりたいことや、将来の希望進路に関しての実際の情報収集を何ら行っていない生徒が登場する。その後、進路活動を積極的に行っていない層ほどフリーター、無業者になる傾向があることを統計データを用いて明らかにしている。そして前述したような「自分らしさ」の希求と実際の就業機会のアンバランスという問題に言及し、「自分探し」に没頭する前に具体的な職業体験を通じて「自分らしさ」を手に入れる道を提示する。

以上の議論をまとめると、「自分探し」が進路情報収集の消極性をもたらし、最終的にその進路への消極的な姿勢が、フリーターや無業者へとつながっていくという道筋が示されている。ただしこの論文の課題として、「自分探し」の影響は個人的な事実による示唆的なものにとどまり、量的データによる裏づけはなされていないということがある。

ここまでで、「自分探し」をめぐる先行研究を俯瞰してきたが、そこから次のような課題が浮かび上がってくる。1つ目は、直前ですでに触れたが、「自分探し」に対する批判的言説に(特に量的な)根拠が乏しいことである。これに対し本稿では量的データを用いて、先行研究に示唆されている「自分探し」の弊害についての実証を試みる。今回扱うその弊害とは、生徒の「自分探し」と、進路選択における意識の関係性についてである。

2つ目は、三浦、荻谷の両者がともに、「自

分探し」よりも具体的な職業経験の重要性を提唱しているにもかかわらず、職業準備としての場合である専門高校の存在が視野に入っていないという点である。

3つ目は、生徒の個性観を分析する概念として、現状では「自分探し」という概念しか用いられていないことである。個性観とはここでは、「自分らしさ」についてどのように考えているか、ということを目指し、本稿において鍵となる概念である。本稿では、生徒の個性観を「自分探し」のみに限定せずにより広く捉えるモデルを提示することによって、「自分探し」への処方箋をも射程に入れた、より建設的な議論を目指している。

3 本稿で用いる概念の提示

本稿においてもっとも重要となる概念が、生徒の個性観であることは前節で述べた。これを把握するための質問が、Q43「あなたにとっての『個性』に対するイメージとして近いものはどれですか」であるが、対する回答は、図1に沿って設定した。図1における分類を本稿の分析枠組みとして主に用いる。個性は自分の中にあると考えるか、あるいは自分の外にあると考えるか、また、個性は可変的と考えるか不変と考えるかどうかの2軸²

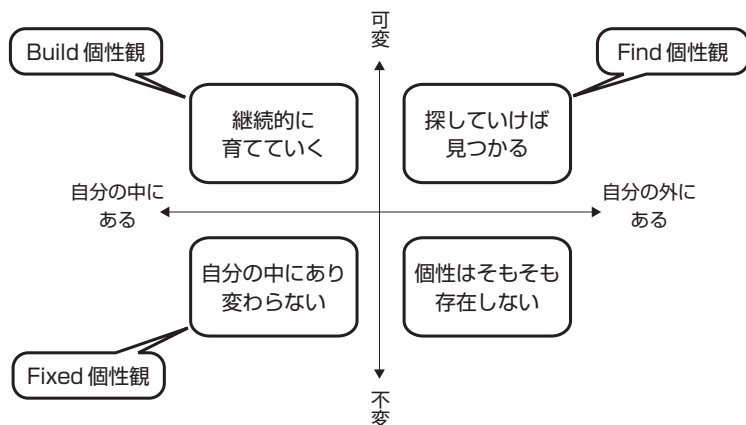
によって個性観を4類型に分類したのが図1である。このうち、第1象限の「探していけば見つかる」との回答を「Find個性観」と定義し、以後この語を用いる。以下同様に、第2象限を「Build個性観」、第3象限を「Fixed個性観」と定義する。ところでこのうちFind個性観に関しては、個性は探せば見つかると考えているという点で、「自分探し」に親和的な個性観であるといえることができる。

なお、以降の分析において個性観を変数として使用する際、個性を「そもそも存在しない」と考える回答を除いて表示する。個性観として量的に少なく、かつ質的にも他の個性観と明らかに異なると判断したためである。それぞれの分布は、専門高校でFind個性観が37.0%、Fixed個性観が37.9%、Build個性観が17.8%、個性は「そもそも存在しない」が7.3%であった³。

4 仮説

- 理論仮説1：Find個性観を持つ生徒ほど、将来展望が開けていない。
- 作業仮説1-1：個性を「探していけば見つかる」ものと考えている生徒ほど、進路に関する情報収集に消極的である。
- 作業仮説1-2：個性を「探していけば見

図1 個性観4類型



つかる」ものと考えている生徒ほど、進路に対して悲観的なイメージを持っている。

●理論仮説2：成績下位の生徒ほど、進路情報収集に消極的で、また、将来の進路に対して悲観的なイメージを持っている。

○作業仮説2-1：中2時校内成績下位の生徒ほど、進路に関する情報収集に消極的である。

○作業仮説2-2：中2時校内成績下位の生徒ほど、進路に対して悲観的なイメージを持っている。

●理論仮説3：成績下位かつFind個性観を持つ生徒は、特に将来展望が開けていない。

○作業仮説3-1：中2時校内成績下位で、かつ個性を「探していけば見つかる」ものと考えている生徒は、特に進路に関する情報収集に消極的である。

○作業仮説3-2：中2時校内成績下位で、かつ個性を「探していけば見つかる」ものと考えている生徒は、特に進路に対して悲観的なイメージを持っている。

●理論仮説4：専門高校に特徴的な授業は、Find個性観に代わる個性観をはぐくむ。

○作業仮説4-1：作業を通して何かを作りあげる授業が多いほど、生徒は個性を「探していけば見つかる」もの以外のものとして考える傾向がある。

○作業仮説4-2：継続的に課題を追求する授業が多いほど、生徒は個性を「探していけば見つかる」もの以外のものとして考える傾向がある。

まず理論仮説1は、「自分探し」志向が進路選択の上で弊害を引き起こしているかを明らかにするためのものである。ここでは荻谷に依拠し、進路情報収集への消極性、進路に対する悲観的イメージといった、先行研究中で示唆された弊害を検証する。

つづいて理論仮説2～3では、「自分探し」

志向による弊害がどのような層に顕著であるのかを分析する。ここで参考にしたのは日本労働研究機構(2000)である。これによると、偏差値ランクや成績が下位であるほどフリーターになる者が多いという結果が出ている。この知見を再検証するのが理論仮説2である。また、成績下位でかつ「自分探し」志向がある生徒ほど、前述の弊害が顕著に見られるのではないかと考え、理論仮説3を設定した。

理論仮説4では、自分探しの弊害を克服する処方箋を探るために専門高校の授業に注目する。専門高校における作業を伴う授業や、継続的に課題に取り組む授業が、職業への準備や、自己を磨き、表現する場として機能し、生徒の「自分探し」志向を緩和するのではないかと考えるためである。

5 変数の設定

本稿では専門高校の生徒のみを対象とした分析を行う。したがって分析サンプルの重みづけとしてウェイト1を使用している。

進路に関する情報収集の積極性をはかる指標として、Q48A「進路に関する資料やパンフレットを見る」、Q48B「担任や進路指導の先生に相談する」の2つを合成した変数を用いる⁴。また将来の進路に対するイメージをはかる指標として、Q51D「高校卒業時に希望する進路にいけると思う」、Q53I「将来、つきたい仕事につけるだろうと思う」の2つを合成した変数を用いる⁵。

成績に関する指標としては、中学2年生時の校内成績を用いる(Q24)。これは、高校における成績指標を用いるよりも、学校間における評価のぶれが小さいという仮定による。「下のほう」「中の下」を「成績下位」、「中くらい」を「成績中位」、「中の上」「上のほう」を「成績上位」とした。

授業形態とその頻度に関する質問、Q4A「作業を通して何かを作りあげる授業」、Q4F「一定の期間(1ヶ月以上)をかけて課題を達成する授業」に対する回答は、「ほとんど

すべて」「半分より多い」を「多い」、「半分くらい」を「半分くらい」、「半分より少ない」を「ほとんどない」を「少ない」とした。

6 分析

表1を見てみると、Find個性観を持つ生徒の半数以上が進路情報収集に積極的ではないということが読み取れる。対してBuild個性観を持つ生徒の実に65%近くは、高校2年生の時点において進路情報収集に積極的である。

表2は、個性観と将来希望する進路に進むことができると思うかというイメージの関係について分析したものである。ここではFind個性観を持つ生徒の半数以上は、進路に対して悲観的なイメージを持っていることが明らかになった。ここに、作業仮説1-1「個性を『探していけば見つかる』ものと考えている生徒ほど、進路に関する情報収集に消極的である」、1-2「個性を『探していけば見つかる』ものと考えている生徒ほど、進路に対し

て悲観的なイメージを持っている」はそれぞれ支持されたといえる。

Find個性観を持つ生徒の多くは、自分の進路に関する情報収集にあまり積極的でないのに加え、自分の将来に関しても、希望の進路に行けないと思うなどといった悲観的なイメージを持っている者が多いことがわかった。しかもこの傾向は、まだ将来の夢が決まっていない生徒がFind個性観を持つ生徒に多いから起こる、ということではなさそうである。個性観を独立変数、Q49「将来やりたい仕事」がどれくらい具体的に決まっていますか」を従属変数としてクロス集計したところ、有意な差は見られなかった。やりたいことはあるのに、それに関する情報収集には積極的になれず、漠としたまま将来に対して不安を抱いている生徒の姿が、ここから浮かび上がってはこないだろうか。ここに、進路に関する情報収集に積極的でない層ほど無業者になりやすい、という先行研究と、「自分探し」の持つ弊害が接続されたということができる。

表1 「進路情報収集積極性」×「個性観」

分析対象は専門高校の生徒 Q48A・B×Q43A

個性観	進路情報収集積極性		合計	N
	高い	低い		
Find個性観 (%)	46.7	53.3	100.0	(820)
Fixed個性観 (%)	50.0	50.0	100.0	(838)
Build個性観 (%)	64.3	35.7	100.0	(392)
合計 (%)	51.4	48.6	100.0	(2,050)

0.1%水準で有意 p=0.000

表2 「進路イメージ」×「個性観」

分析対象は専門高校の生徒 Q51D・Q53I×Q43A

個性観	進路イメージ		合計	N
	良い	悪い		
Find個性観 (%)	48.6	51.4	100.0	(807)
Fixed個性観 (%)	53.7	46.3	100.0	(834)
Build個性観 (%)	62.9	37.1	100.0	(394)
合計 (%)	53.5	46.5	100.0	(2,035)

0.1%水準で有意 p=0.000

作業仮説2-1「中2時校内成績下位の生徒ほど、進路に関する情報収集に消極的である」、2-2「中2時校内成績下位の生徒ほど、進路に対して悲観的なイメージを持っている」にそれぞれ対応する表3、表4からは、成績下位の生徒ほど進路に対する情報収集に積極的でもなければ、不安も大きいことが見て取れる。よって作業仮説2-1～2は支持された。

表5からは、中2時校内成績下位でFind個性観を持つ生徒では、進路情報収集に積極的な生徒の比率が43.5%と際立って落ち込んでいることがわかる。それに対して注目すべき点としては、全体的に進路情報収集に積極的でない成績下位において、Build個性観を持つ生徒は実に60%近くの生徒が積極的に活動しているということである。同じ成績下位の生徒でも、Find個性観を持つ生徒とBuild個性観を持つ生徒の間では、進路情報収集への積極性に大きな差が見られることがわかった。

成績下位の生徒で見た場合、進路に対して

肯定的なイメージを持っている生徒の比率は49%ほどであった(表4)が、その中でもFind個性観を持つ生徒ではその比率が43.6%と低い水準であることが表6から見て取れる。これは他のどの層よりも際立って低い水準である。以上より、作業仮説3-1「中2時校内成績下位で、かつ個性を『探していけば見つかる』ものと考えている生徒は、特に進路に関する情報収集に消極的である」、3-2「中2時校内成績下位で、かつ個性を『探していけば見つかる』ものと考えている生徒は、特に進路に対して悲観的なイメージを持っている」は支持されたといえる。

さて、ここまで検証してきた仮説によって、「自分探し」志向を持つ生徒は進路に関する情報収集に積極的でなく、かつ進路に対して悲観的なイメージを持っている者が多い傾向にあること、さらにそれは成績下位の生徒において顕著に見られることが明らかになった。「自分探し」の弊害が実証されたということができよう。しかしこれだけでは、

表3 「進路情報収集積極性」×「中2時校内成績」

分析対象は専門高校の生徒 Q48A・B×Q24

中2時 校内成績	進路情報収集積極性		合計	N
	高い	低い		
上位 (%)	61.8	38.2	100.0	(293)
中位 (%)	52.0	48.0	100.0	(664)
下位 (%)	48.4	51.6	100.0	(1,083)
合計 (%)	51.5	48.5	100.0	(2,040)

0.1%水準で有意 p=0.000

表4 「進路イメージ」×「中2時校内成績」

分析対象は専門高校の生徒 Q51D・Q53I×Q24

中2時 校内成績	進路イメージ		合計	N
	良い	悪い		
上位 (%)	65.4	34.6	100.0	(283)
中位 (%)	56.1	43.9	100.0	(660)
下位 (%)	48.7	51.3	100.0	(1,079)
合計 (%)	53.5	46.5	100.0	(2,022)

0.1%水準で有意 p=0.000

表5 「進路情報収集積極性」×「個性観」×「中2時校内成績」

分析対象は専門高校の生徒 Q48A・B×Q43A×Q24

中2時 校内成績	個性観	進路情報収集積極性		合計	N
		高い	低い		
上位	Find個性観 (%)	50.5	49.5	100.0	(101)
	Fixed個性観 (%)	59.8	40.2	100.0	(122)
	Build個性観 (%)	81.4	18.6	100.0	(70)
	合計 (%)	61.8	38.2	100.0	(293)
0.1%水準で有意 p=0.000					
中位	Find個性観 (%)	50.7	49.3	100.0	(276)
	Fixed個性観 (%)	48.5	51.5	100.0	(268)
	Build個性観 (%)	63.0	37.0	100.0	(119)
	合計 (%)	52.0	48.0	100.0	(663)
5%水準で有意 p=0.026					
下位	Find個性観 (%)	43.5	56.5	100.0	(437)
	Fixed個性観 (%)	48.2	51.8	100.0	(446)
	Build個性観 (%)	59.5	40.5	100.0	(200)
	合計 (%)	48.4	51.6	100.0	(1,083)
1%水準で有意 p=0.001					

表6 「進路イメージ」×「個性観」×「中2時校内成績」

分析対象は専門高校の生徒 Q51D・Q53I×Q43A×Q24

中2時 校内成績	個性観	進路イメージ		合計	N
		良い	悪い		
上位	Find個性観 (%)	58.5	41.5	100.0	(94)
	Fixed個性観 (%)	64.7	35.3	100.0	(119)
	Build個性観 (%)	75.0	25.0	100.0	(72)
	合計 (%)	65.3	34.7	100.0	(285)
10%水準で有意 p=0.086					
中位	Find個性観 (%)	53.1	46.9	100.0	(277)
	Fixed個性観 (%)	56.0	44.0	100.0	(266)
	Build個性観 (%)	63.2	36.8	100.0	(117)
	合計 (%)	56.1	43.9	100.0	(660)
有意差なし p=0.177					
下位	Find個性観 (%)	43.6	56.4	100.0	(431)
	Fixed個性観 (%)	49.6	50.4	100.0	(446)
	Build個性観 (%)	58.1	41.9	100.0	(203)
	合計 (%)	48.8	51.2	100.0	(1,080)
1%水準で有意 p=0.003					

表7 「個性観」×「作業授業」

分析対象は専門高校の生徒 Q43A×Q4A

作業授業	個性観			合計	N
	Find個性観	Fixed個性観	Build個性観		
多い (%)	36.3	38.2	25.6	100.0	(477)
半分くらい (%)	42.3	39.5	18.2	100.0	(603)
少ない (%)	40.2	42.9	16.9	100.0	(1,014)
合計 (%)	39.9	40.8	19.2	100.0	(2,094)

1%水準で有意 p=0.001

表8 「個性観」×「継続的課題追求授業」

分析対象は専門高校の生徒 Q43A×Q4F

継続的課題 追求授業	個性観			合計	N
	Find個性観	Fixed個性観	Build個性観		
多い (%)	35.1	40.3	24.5	100.0	(387)
半分くらい (%)	39.9	39.0	21.1	100.0	(582)
少ない (%)	41.9	41.9	16.2	100.0	(1,096)
合計 (%)	40.0	40.8	19.2	100.0	(2,065)

1%水準で有意 p=0.003

問題点を確認しただけに過ぎない。では、ここから、「自分探し」の弊害を克服する方法を見出すことはできないだろうか。

すると、そこに浮かび上がってくるのは、Find個性観とほぼ結果的に対極の位置にあるBuild個性観である。Build個性観を持つ生徒は、進路情報収集の積極性、進路への肯定的イメージにおいて、どちらも60%を上回る(表1～2)。成績上位ではBuild個性観を持つ生徒の81%が進路情報収集に積極的であり(表5)、進路へのイメージに関していえば75%もの生徒が自らの進路を肯定的に捉えている(表6)。成績下位においても、Build個性観を持つ生徒は進路情報収集積極性、進路への肯定的イメージにおいて60%程度の水準を保持しており、その他の個性観とは一線を画す特徴を持っているといえる。このBuild個性観を、「自分探し」の弊害を克服する処方箋とすることはできないだろうか。以上のような個性観に注目しながら、「自分探し」を克服する方法を専門高校の授業の中に見つけたのが作業仮説4-1～2である。

表7、表8それぞれの独立変数は、どちらも専門高校の特徴的な授業形態である。そのような授業に触れる機会が多い生徒ほど、Build個性観を持つ比率が高くなっていることがここから読み取れる。表からは、このような授業に多く触れることによってBuild個性観を持つ生徒が増加し、対してFind個性観を持つ生徒は減少する傾向が見られる。このことは、「自分探し」の弊害を克服するための個性観の涵養に、専門高校の、作業を通じた授業であるとか、継続的に課題に取り組む授業が影響を与えているということである。作業仮説4-1「作業を通して何かを作りあげる授業が多いほど、生徒は個性を『探していけば見つかる』もの以外のものとして考える傾向がある」、4-2「継続的に課題を追求する授業が多いほど、生徒は個性を『探していけば見つかる』もの以外のものとして考える傾向がある」はともに支持されるとともに、これらのような授業によってBuild個性観が一定程度涵養されることが明らかとなった⁶。

7 結論

以上においてもたらされた知見から、次のようなことがいえる。生徒の「自分探し」志向は、進路活動への消極性、将来に対する悲観的イメージという弊害をもたらすことが明らかになった。また、その弊害を克服する手がかりとして、「継続的に育てていく」という個性観が示唆され、それは専門高校における作業を伴う授業、継続的に課題に取り組む授業によって影響を受け、一定程度涵養されるということも同時に明らかとなった。

ここからは解釈に頼ることになるが、専門高校での作業を通じた授業、課題に継続的に取り組む授業は、必然的にじっくりと腰をすえて自己（の表現）と向き合うゆえ、「自分らしさ」をどこかから見つけてこようとするよりはむしろ、自己と向き合い、育てていこうとする考えに親和性を感じさせるのではない

だろうか。また、職業を意識し体験を重視した授業は、具体的な経験を通して、そこから自分らしさや、自分のやりたいことを見出すという道筋を生徒の前に提示しているということも考えられる。仕事（への準備）を通して、自分を育てるという道筋が、専門高校において見出せると考えるのである。また、今回注目したBuild個性観は、Sennett (2006=2008) による「物語性」（出来事を時間の中で結びつけること、経験を積み上げていくこと）という概念とリンクするように思われる。不安定性の増す社会の中で、長期的な視点に立って自らの人生を物語っていきける意識の形成に専門高校の授業が貢献できるとすれば、この個性観と専門高校の授業に重要な意義を見出すことができるのではないか。ここにおいて本稿は、「自分探し」の弊害を克服する環境としての専門高校の意義と、「自分を育てる」という個性観の意義を見出すものである。

<注>

- 1 「個性重視」という標語が教育政策に登場したのは、1985年の臨時教育審議会答申とされる（森田ほか編 1995）。
- 2 速水（2008）による、「外」に自分を探しに向かう意識と、「内」に自分を探しに向かう意識の分類を参考として横軸を設定した。また、所与のものとしての「ほんとうの自分」を求める意識と、「新しい自分」を求める意識の両方の存在を鑑みて、縦軸を設定した。
- 3 今回の分析では扱わないが、普通科高校の生徒では、Find個性観が42.1%、Fixed個性観が38.9%、Build個性観が13.9%、個性は「そもそも存在しない」は5.1%であった。専門高校と単純比較すると、Find個性観がやや多く、Build個性観がやや少ない。
- 4 アルファ係数は0.736である。
- 5 アルファ係数は0.679である。
- 6 ただし、母集団を普通科高校の生徒にして分析したところ、有効ケース数が少ないことから、統計検定に耐えられなかった。今回の分析の普通科高校への応用が本稿の課題であるといえる。

<引用文献>

- 玄田有史、2001、『仕事のなかの曖昧な不安』中央公論新社。
- 速水健朗、2008、『自分探しが止まらない』ソフトバンククリエイティブ。
- 苅谷剛彦、2008、『学力と階層』朝日新聞出版。
- 久木元真吾、2003、『「やりたいこと」という論理——フリーターの語りとその意図せざる帰結』『ソシオロジ』48(2): 73-89。
- 三浦展、2005、『仕事をしなければ、自分は見つからない』晶文社。
- 森田尚人・藤田英典・黒崎勲・片桐芳雄・佐藤学編、1995、『教育学年報 4 個性という幻想』世織書房。
- 中間玲子、2008、『“自分探し”類型化の試みとそれぞれの特徴について』『福島大学研究年報』4: 7-16。
- 日本労働研究機構、2000、『調査研究報告書 No.138 進路決定をめぐる高校生の意識と行動——高卒「フリーター」増加の実態と背景』日本労働研究機構。
- リクルート、2009、『高校の進路指導に関する調査報告書』。
- Sennett, Richard, 2006, *The Culture of the New Capitalism*, Yale University Press. (=2008, 森田典正訳『不安な経済／漂流する個人』大月書店。)
- 山田昌弘、2002、『フリーターの置かれている現状と将来展望』『労働の科学』57(2): 15-8。